

5冊目の詩集

家族の愛に支えられ

江上研究所代表 江上 尚志さん(71) 城廻在住

〈奥さまやお孫さんたちにも祝福されて=パーティ会場で〉

江上さんの古巣である、東京・丸の内の東京海上日動火災保険ビル2階カフェテリアで1月23日、詩集「白銀比」(はくぎんのうた)の発刊を祝う会が開かれた。この催しには、150人余の関係者がお祝いに駆け付け、交友の広さを物語った。かつての同僚や学生時代の仲間、それに鎌倉・玉縄での地域活動、社会福祉に携わる仲間たち。



80歳になったらもう一冊詩集を発刊して、完結させる心意気が示された。

江上さんの詩には、日々の生活の中に宿る人々の息づかみや、ありのままの自然がうたい込まれている。難しい文章を駆使することより、平易な判りやすい文体で、とくに人間が生きとし生きていくなかで、読む人自身が己の人生と重ね合わせることで納得できたり、感動を得ることができる。

「詩集の中に『おやじと風呂に入ったのはいつのことだったろう』との一説がありました。なにげない問いかけでしたが、ふと、わが身のことを振り返さ

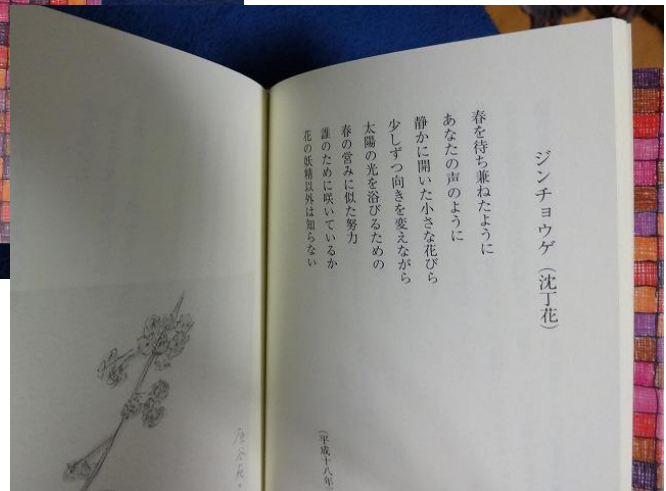
せてくれます。判りやすい文章で綴られて読みやすく、あらためて江上さんの才能に驚嘆しました」と、パーティの冒頭に挨拶した東京海上日動火災保険の元専務だった梅田泰雄さんは、その実力に舌を巻く。

代表世話人である、かつての勤め先の同僚・先輩たちからも「なんだか知らないけど、いつもポケットにメモと鉛筆を入れていて、なにかあるとメモっていた」。



いけど、いつもポケットにメモと鉛筆を入れていて、なにかあるとメモっていた」。

何だいこいつはと思



っていたけど、ついに5冊目の詩集をだすとは」と、発刊の度に祝う会の音頭取りをしてきた人達にしても、江上さんの詩への熱情、強い思いには畏敬の念を隠せない。

80歳にはもう1冊

これまで、10年を一区切りにして、その間に書き溜めた詩を1冊の詩集として発刊してきた。30歳の折に第一作の「惜春賦」を刊行、その後40歳の「日輪頌」50歳の「季節風」とつづく。平成25年70歳になった節目に5冊目の刊行にこぎつけた。前作である平成14年の定年を前に発刊した第四詩集は、60歳の還暦を迎えたものの、病魔との激しい闘いの真っ最中だったという。これからも、家族たちの笑顔を原動力にしながら、「80歳になったら最後の1冊を」と誓う。

同年輩の発刊を祝う会世話人の面々からは「本は出来ても俺たちが生きてい

る保証はないし、動けても、杖を突きつつではさまにはならないしなー」とのぼやきの声に、祝う会の会場も笑いの渦に。

今回発刊された「白銀比」でも鎌倉のことを題材にした詩が数多く掲載されているが、今後も「八幡(鎌倉八幡宮)さまの行事などに出かけて行って、鎌倉を中心に描いていければと思っています。詩の中身も変化していくことになるかもしれませんが、これからそんな方向に進んでみたい」と、江上さん自身抱負を語っている。

福祉や地元でのネットワークを

40年余のサラリーマン生活を終え、地域の福祉活動への取り組みは世の中への恩返しのもりでもあり、江上さん自身のライフワークであったに違いない。すでに40歳代の頃から自治会活動に参画して、大船駅西口開発促進の旗振り役を担ったり、24年の秋には玉縄城500年祭の中心的立場で事業をリードした。地域と共に生きる喜びは、詩集の中にも表現されている。

ダウン症で誕生したご子息への深い愛は、江上さん自身の活動をかりたてる原動力にもなった。現在も日本ダウン症協会の理事を務めながら、障害を持つ人たちを支援するためDS虹の子会という親の会を組織、さらに「虹の子作業所」や生活ホームの「虹の子ハウス」などを運営するリーダーとしての役割を果たしてきた。

5冊目の詩集である「白銀比」の題字は、奥さまの紗恵子さんの手によるものだが、繊細で巧みな色遣いが特徴で表紙のイラストになっているのは、ダウン症で誕生した次男・英光さんの作品である。その創作力、作品は専門家の間でも高く評価されており、今回のパーティー会場でも英光さんの笑顔は、もう一つの



主役でもあった。

地域での福祉活動や、地元のホームページ「マイタウン玉縄」で活動されていることもあり、鎌倉ロジエマン自治会や玉縄Iネットコミュニティの会長でもある石井英明さんから、江上家にとってもゆかりある、福岡の祝い唄が披露された。

長文のため詩集には掲載されていない藤沢・遊行寺での仏事を読んだ詩を、江



上さん自身が朗読した。臨場感と説得力ある雰囲気大きな拍手が沸いた。

詩集に収録されている「花の季節に」という詩には、友人である岩崎格さんが曲を付け、女声二部合唱曲に仕上がった。会場で岩崎さんがバイオリンを奏でた。

終盤は成蹊大学時代の仲間たちでワンダーフォーゲル部 OB らによる演奏。ふるさと、浜辺の歌など懐かしい曲は全員で合唱。江上さんの人柄を彷彿とさせるパーティで、今後の詩の創作活動、地域や福祉への活動に大きな拍手が寄せられた。

▽

昭和 17 年東京・中野区に生まれる。父親江上茂氏は空手道師範で、昨年 25 年 2 月には生誕 100 年に当たることから「江上茂を語る会」が開かれ、500 人を超える人が、12 の国と地域から参加した。

昭和 40 年成蹊大学政治経済学部を卒業、東京海上火災保険に勤務、定年まで勤める。昭和 59 年には、「虹の子会ダウン症候群児療育センター」設立に参画、平成 12 年には鎌倉市社会福祉協議会監事、平成 19 年には公益財団法人日本ダウン症協会の理事に就く。著書には、5 部作の詩集の他に、「アメリカ旅日記」「ヨーロッパ旅日記」。富士短期大学での講義「保険論」などの論文がある。